

イ) フィブリン糊研究会向け小冊子

ミドリ十字社では、フィブリン糊の調製法や使用方法について記載した2種類の小冊子を作成している。1つは「フィブリノゲン-ミドリ、トロンビン-ミドリをもってする組織・臓器接着法」(1981 (S56)年9月版)であり、もう1つは「手術用接着剤としてのフィブリノゲン-ミドリ、トロンビン-ミドリの応用」(1982 (S57)年版)である。

これらの資料は、ミドリ十字社が1981 (S56)年11月7日に第1回会合を開催したフィブリン糊研究会でのプレゼンテーションを補足する目的で作成されたと報告されている³⁶。一方で、上記研究会の開催以降、研究会以外の医師・薬剤師に本資料を配布し、フィブリン糊の情報提供を行っていたことはあった、とも報告されている³⁷。

これらの資料がフィブリノゲン製剤の販売促進活動のために使われたかどうかの実態は定かでない。参考までに、実態を知るために当時の社員に対する調査を行ったところ(当時の支店長・学術課長・学術課員に対するアンケート(2001 (H13)年4月10日~4月16日実施))、同資料の配布目的について、「フィブリノゲン製剤の販売促進」と回答したのは全体の10%程度であり、「医師からの要望があったから」が73%、「純粋な学術情報提供として」が59%となっていた³⁸。

同調査結果に基づいて、当時のウェルファイド社は、フィブリン糊の販売促進に対する会社の方針について「フィブリン糊を販売促進した可能性は低いと考えられるものの、調査手法の限界から、販売促進について完全に否定し得なかったことは、誠に遺憾である。」³⁹との見解を寄せている。

また、フィブリン糊研究会の内容をまとめた「第2回フィブリン糊研究会記録」が、1983 (S58)年のMedical Postgraduates Supplementに掲載される形でまとめられている。同誌はミドリ十字社の学術部が編集を務め、医学書房が発行したものである。この研究会記録は、フィブリン糊研究会メンバーに対して限定配布されると同時に、参考資料としてミドリ十字社の各支店に配布されている。同記録が各支店でどのように活用されたかを裏付ける資料はないが、フィブリン糊の製剤条件と安定性の検討について書かれた1987 (S62)年の藤原・野口の報告⁴⁰で、参考文献として「11) フィブリン糊研究会記録小冊子. 医学書房(1983)」という記述があり、少なくともフィブリン糊研究会のメンバー以外の人でも利用できる形で、同記録が流通していることが分かる⁴¹。

ウ) 拡売ニュース

上記営業ツールの他に、「拡売ニュース」と呼ばれるものの存在が明らかになっている。

拡売ニュースは、2001 (H14)年4月5日付の三菱ウェルファーマ社報告書によると、「営業本部学術部門から医薬情報担当者個々に対し、自社関連製品に関する最新の医学・薬学情報(主に新規論文)を提供するために作成されていた資料と推察される」ツールであり、医薬品情報担当者への新規学術論文の紹介や専門医とのコミュニケーション強化の一助としての情報提供という位置づけのものであったと推察される⁴²。

³⁶ H13.3.26 ウェルファイド社報告書 p.5

³⁷ H13.3.26 ウェルファイド社報告書 p.5

³⁸ H13.4.19 ウェルファイド社報告書 p.5

³⁹ H13.5.14 ウェルファイド社報告書 p.39

⁴⁰ 藤原良雄, 野口平司. 「フィブリン糊の安定性と使用状況」. 医薬ジャーナル 1987; Vol.23, No.4: 85-8

⁴¹ 厚生労働省提供資料 「フィブリノゲン製剤によるC型肝炎ウイルスに関する調査報告書の公表について」 ファイル19-1 「フィブリノゲン製剤の販売状況について (1989.10.27)」

⁴² H14.4.5 三菱ウェルファーマ社報告書 p.20